



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Ezo as relational territory : mapping and bordering Japan' s north [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Boyle, Edward Kieran
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第12972号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/69401
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Edward_Kieran_Boyle_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学 位 論 文 題 名

Ezo as relational territory: mapping and bordering Japan's north

（相対的な領土としての「蝦夷」：日本北方領域の境界策定と地図作成に関する一考察）

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、非西欧的文脈において領土というものがもつ政治的役割を考察するものである。グローバリゼーションが、近代主権国家と領土の関係性を不安定化させているという事態を受け、近年領土という概念に対し学問的関心が高まっている。しかしながら、現実の政治的实践に示されるように、同質な国家空間から成る世界に対する近代の政治的地図によってなされる主張を認めるならば、これらの分析の多くは歴史的に近視眼的であるといえる。領土というものがどのように形作られるかということを理解するために、この研究は、日本の北限として、形をなさない蝦夷地がどのようにして19世紀の後半までに日本の領土と見なされるようになったのかを考察する。そして、地図と境界という二つの領土的な実践によって、もたらされた視点を通して、蝦夷という名と結びついた土地の表象とその併合を考察する。さらに、本論文では、過去と現在の両方において領土というものを理解するためには、領土的な実践を調べることが重要であることを示したい。

本論文は、各々3章で構成される3つの部に分かれている。第1部では、この研究の理論的、概念的、文脈的背景を提示し、同時に、その概念上の貢献も概略を示す。第1章では、近年注目されている領土の概念を再評価し、分析する。そして、その概念がいかにして、近代西欧国家と結びつけられてきた領土という概念へと還元されたのか調べる。このように時間的にも、空間的にも狭く焦点を絞ってしまうことは、社会の組織化・成形化の手段として理解されるべき一つの概念としての領土という概念の有用性を狭めてしまう。その効能は、現実における領土の概念と一致する必要はない。領土という概念を展開することは、世界における様々な産物の帰属性をどのように理解するかとも深く関わっている。ゆえに、本論文で検討されている地図や境界に象徴されるように、国家というのは政治的实践によって領土というのを正当化し実現化するのである。第2章では、これらの領土的な実践の一つである地図を取り上げる。本論では、地図とパワーを過度に同一視する傾向から距離をおき、地図の概念について考察する。ここでは、個々の地図がより大きな趨勢を象徴するものという考え方ではなく、地図策定というプロセスに焦点を当てている。このプロセスの妥当性と有用性は、近年における地図策定の重要性を示す理論的貢献を取り入れながら、徳川時代の日本やその他近世国家が行った地図策定の比較研究を通じて説明をしている。この理論的枠組みと比較研究により、徳川時代における蝦夷地の地図策定の背景を説明し、このプロセスが蝦夷地を日本の領土として取り入れるために決定的であった点を示す。第3章では、物理的な対象としてではなく、境界という実践の重要性に焦点を当て、近代における境界の意味を問う。学際的学問領域である境界研究に依拠して、境界とは空間的広がりに対する権力的主張であるという点を強調したい。加えて、徳川自体における境界の比較研究を提供している。さらに、理論的・概念的考察によって、過去と現在において政治における領土の重要性を理解する手段として、相関的な領土の概念を浮き彫りにする。

第2部は、日本との関連における政治空間としての蝦夷地の成り立ちを探るために、第1部で展開した理論的・実証的背景をさらに発展させている。第4章では、蝦夷地が日本と分離された状態で理

解されていたことを検討する。この章では、松前と蝦夷地の境界が、当時の行政区分の結果であった重要性に注目している。この境界は、蝦夷地に関する権利と知識を松前藩に帰属させる点では重要であった。第5章では、国家レベルにおける境界を統治する権力の実効性に焦点を当て、松前藩の行政区分の境界を、蝦夷地を行き来する人々や物品の動きを規制する辺境として捉えている。こうした動きにより、蝦夷地は江戸時代において日本の領土として公式な地図にも描かれるようになる。第6章では、この境界が世界における日本の地位の理解にどのように貢献したかと、そしてそれが蝦夷地に対し、どのように反映されたかという点を検討している。この過程は究極的には、蝦夷地がどのようにして19世紀に北海道として日本に組み入れられることになったかを描き出している。

第2部においては蝦夷地がどのように日本の領土として組み入れられたかという点に焦点を当てたが、第3部では、蝦夷地がどのように世界地図にて表現されたかということを検討している。第7章では、欧州の地図において蝦夷地がどのように表現され作成されたというのを当時の地理的文脈に沿って説明し、またそれがどのように日本の蝦夷地理解に影響を及ぼしたかを分析している。第8章では、蝦夷地の理解の関連性に焦点を当て、ヨーロッパでの蝦夷地に関する知識がどのように蝦夷地に跳ね返ってきたかを分析している。近藤重蔵が示したように、蝦夷地を取り巻くネットワークや日本における政治的実践においてこのネットワークがどのような影響を及ぼしたかという点を検討している。第9章では、高橋影保の地図作成に焦点を当て、蝦夷地という空間がどのように世界地図に再導入されているかという過程を分析している。この第3部においては、地図作成や境界が領土を策定する過程において極めて重要であることを浮き彫りにし、様々なスケールにおいて領土というのがどのように組み入れられまた再導入されるかという点を検討した。これは、領土が政治的重要性を帯びる過程においては、領土の相対的な理解が必要であるということを示している。

結論では、領土という概念を考察するためには歴史的視点を持つことを思い出す必要があると主張したい。特に、概念を理解することへの相関的アプローチの価値を強く主張する。このテーマに関しては現在の文献の多くが、「抽象空間」の出現の重要性を説いている。抽象空間は、全地球を包含することのできるビジョンと結びついたものであり、世界を領域国家の空間へと変えるという過程によって決定的に重要なものである。ここにおいて、領土というのは絶対的なものではなく、むしろ「相関的」な概念であると強調したい。同様に、現在において領土という概念を理解する際に多大な貢献をするものである。領土の概念が移り変わるその有様に焦点を当てる際に、その文脈を与えるものである。

本論は、領土という概念を理解するにあたって、地図作成や境界という領土をめぐる実践という文脈からアプローチしている。なぜならば、領土の出現を促す決定的な実践であり、これは認識論的・存在論的レベルでも機能している。このような実践は、空間自体を理解するのではなく、特定の空間における行動を理解するために極めて重要である。このような行動は、境界と地図作成という実践において再解釈される。また、このような実践は領土の出現にも重要な要素である。このような主張を認識することにより、地図や境界が世界を理解する知識としても役立つ枠組みである。このような実践の繰り返しと象徴が、まさに領土を世界の空間として再導入させるのである。世界における「領土化」というのは領土の相関性によって定義される。

本論文では、地図作成や境界に関する文献に依拠しながらも、蝦夷地という事例を考える上で再解釈している。地図作成や境界は、決して固定されたものではなく常に変化するものであるという点を強調している。この点を強調することによって、地図作成や境界が生み出す産物ではなく、このような実践がどのように受け入れられたかということに焦点を当てることができ、この地域の策定や統治に関する歴史の理解が進むことを期待する。